



小田実全集（小説 第33巻）

「アボジ」を踏む

小田実短篇集



講談社  
小田実全集



Makoto Oda



目次

I

「アボジ」を踏む

「三千軍兵」の墓

河のほとりで

43号線の将軍

チャンクン

テンノウヘイカよ、走れ

II

折れた剣

ある登攀

あとがき

207

181

100

76

55

38

21

8



「アボジ」を踏む

小田実短篇集



I

## 「アボジ」を踏む

「ぼくは生まで帰る」と「アボジ」は私に言った。まだ、元気なころのことだ。そのことばで決意表明したのか、よろしく手配してくれと頼んでいたのか、そのどちらでもあつたにちがいない。

死んだあと、棺ごと飛行機に載せて運ぶ。「アボジ」によると、日本の航空会社はやつてくれないが、韓国の飛行機は運んでくれる。「アボジ」の同郷の友人知己も何人かそのかたちで「生まで帰った」。彼らの場合も、「アボジ」の場合も、「生まで帰る」先は済州島。そこは土葬だ。土葬されて、先祖代々の墓地に眠る。

「アボジ」は六十数年前、十七歳で済州島から大阪まで船で来た。島では仕事がなく、食えなかったからだ。その事情は彼のつれあいの「オモニ」も同じで、彼女も済州島から大阪まで働きに来た。海あ女まだった「オモニ」は四国の徳島に天草とりに行き、海女の舟を漕いでいた「アボジ」と知り合つて結婚した。「アボジ」は十九歳。「オモニ」は二十歳。一歳年上の姉さん女房だ。そのあと住所も仕事も転々、おしまいに神戸、長田に落ち着いて戦中、戦後を九五年一月十七日——大地震の日までくらしした。

「アボジ」も「オモニ」も、月日はちがつたが、同じ船で済州島から大阪まで来ている。ただ「オモニ」

の乗って来たのは「キミガヨ丸」、「アボジ」のは「クンデワン」だ。「クンデワン」は日本語で言えば「君が代丸」だが、「アボジ」には「君が代丸」に乗って来たおぼえもつもりもなかったようだ。そして、「アボジ」にとつて、朝鮮は済州島だった。ソウルへは、彼の八十五年にわたる人生のあいだ、一度たりとも行ったことがなかった。釜山は済州島への飛行機の乗り換えで空港は通過しているが、釜山の市街には、私は「バスでちよつと行つて来たらどうですかね」とけしかけたが、足を伸ばした形跡はない。いつも空港の建物のなかでタバコをふかしていた。「オダ君、ぼくはべつに街に用事なかったヨ」と「アボジ」は言った。

彼が「オダ君」と呼ぶ私が「アボジ」と縁ができたのは、十何年かまえ、「アボジ」の末娘と結婚したからだ。「縁ができた」とは奇妙な言い方かも知れないが、私にはその実感がある。そして「アボジ」もそう思っていたのではないか。この年になつて日本人と縁ができた。人生は妙だ、と。

「アボジ」には七人、娘がいた。娘ばかりだ。ひとりには「北朝鮮」に「帰国」したが、あと六人は日本にいて、神戸、大阪、東京、西宮でそれぞれ家庭をもち、それぞれの人生を生きている。「アボジ」の孫は「北」の孫を入れて、すでに八人。ヒ孫も、「北」のをに入れて三人、いや、四人だったか。六人の娘の政治的帰属について言えば「在日朝鮮人」「在日韓国人」半数ずつ、「オモニ」「アボジ」は「在日韓国人」とそれぞれに分かれてややこしいが、今ここでこの政治的帰属についてあれこれ論議するつもりはない。元来、「南北分断」は不合理、非常識な事態で、合理的説明をすることはできない。合理的説明をすることができないものを論議してはこちらまでおかしくなる。いつか「アボジ」が言った「オダ君、ぼくは金さんキムや朴はんパクが生まれるまえから朝鮮人だったヨ」がこの不合理、非常

識な事態の一切を説明している。「金さん」は、もちろん、「北」の金日成、「朴はん」は「南」の朴正熙のことだ。二人がまだ生きていたところの話である。

「アボジ」の七人の娘ムコのうち、日本人は「オダ君」の私だけだ。そして、「アボジ」の孫のうち、日本人——「日本国籍」をもつという意味での日本人は今小学校五年生の私の娘だけだ。

私は、人相、風体はなほよろしからぬ男だ。それにわるいことに「アボジ」と「オモニ」にはじめて会ったとき、革の肘当てのついた一張羅の上衣を着て行った。上品に洒落のめしたつもりだったのだが、「オモニ」の眼には、かわいい娘をたぶらかして売り飛ばす日本人の「ヤクジャ」に見えた。イルボンサラム  
「ヤクジャ」は「ヤクザ」だが、「ヤクジャ」と「オモニ」に言われるとたちまち貫禄を失なつて何やら喜劇の登場人物めいて来る。「アボジ」は「アボジ」で、こいつ、新しい上衣を買う金もないので、破れた肘を肘当てでごまかすと考えていた。開口一番、彼は言った。「金あるか。なかつたらやるで。」

このみごとなセリフを、長田の古ぼけた戦災焼け残りの棟割り長屋（焼夷弾は屋根を貫通して二階に落下したが、「オモニ」が必死に火叩きをふりまわして幸い消し止めることができた）の住人の、なけなしの貯えでくらししていた「アボジ」が口にしたのは、まさに男の意地、見栄というものだ。「アボジ」は海女舟の漕ぎ手、土方、人夫、工員、行商、闇屋、いろいろやつたあと、戦後は長田でそのころ誰もがやり出したゴム靴製造で大儲けした。どこかの工場の機械一台を「リース」してゴム靴をつくつてはそのまま自分でかついではるばると東北地方は八戸、青森あたりまで売りに出かけた。田

畑の仕事にゴム靴は欠かせない。「オダ君、ぼくのゴム靴はトプように売れたで」と「アボジ」はよく私に言った。しかし、この大儲けは長くつづかなかつた。同胞朝鮮人の相棒が、今の規模で言えば、「億」の単位の金を持ち逃げしたのである。以来、彼は人生を達観したのか、それとも金儲けいろいろやってみてもうまく行かなかつたのか、「オモニ」と娘が君臨する女系家族のなかでいつも黙ってタバコをふかし酒をのむ生活に入った。タバコははじめは朝鮮風長ギセルを使つてのきざみタバコのちには紙巻き。日本タバコ、韓国タバコ、「北朝鮮」タバコ、中国タバコ、西洋タバコ。このタバコの羅列のおしまいの三種のタバコは私が旅先で買って来たものだが、どのタバコも彼は指に火がつくほどまでにゆっくり丹念にすつた。見ていて、いかにもうまそうであつた。酒はマツカリ、人參酒、日本酒、ウイスキー。これもうまそうにゆっくり丹念にのんだ。

いや、彼の人生を色どつたものとして、もう二つ、言っておかなければならない。ひとつはパチンコ。毎日、近くのパチンコ店をひとめぐり、ふためぐり、あるいは、勝ち、あるいは負けた。もうひとつは女。「アボジ」は昔は「ゲリー・クーパー」と娘たちに言われた男であつた。私と縁ができるところには、残念ながらすでに年老いてシワとシミが顔全体を激しく覆つていたが、たしかにその面影は残つていた。その上、女に好かれる男には、元来気がやさしく、器用、まめなのが多いが、「アボジ」はこの三条件をすべてもつていた。「アボジ」が朝早く仕事があると云つて朝飯も食わずに出かける。こんな年よりに朝から仕事などあるはずもないと「オモニ」があとをつけて行くと、「アボジ」はどこかの家で上品な日本人のおばあさんとさしむかいで朝飯を食べていた。一事が万事、年老いてもこうなのだから、ゴム靴製造・行商の「アボジ」の全盛時代、「コーリアン・ゲリー・クーパー」

の行くところ、八戸であろうと青森であろうと、すべて朝食さしむかいがあつてふしぎはない。しかし、長年海女で独立独歩で生きて来て、「アボジ」をふくめてグウタラ男ども何するものぞの氣概に満ちた「オモニ」はかえつてその氣概のせいか、「アボジ」はベッピンやろ。誰でも寄つて来たがるんや」と心のひろいことを言い、「わたしらもう年をとつたやろ。友だちみたいに仲ようやらんといかんのや」と至高の名言を吐いた。この心ひろきやさしいところがあつて、「オモニ」は毎日、「アボジ」にケンカを吹っかけながら長年それでも二人の生活をつづけて来られたにちがいない。

「オモニ」が海女という女の肉体労働で生きて来た女性なら、「アボジ」は土方その他の男の肉体労働で長年生きて来た男だ。それは「アボジ」の岩石のごときからだを見ればすぐ判つた。「アボジ」のそのからだを最初に見たのは、温泉に行つて岩風呂にいっしょに入ったときだ。岩風呂の裸岩にまじつて、「アボジ」の裸体もまたゴツゴツと立つて見えた。もう少し正確に言うと、岩石が年月を経て風化、磨滅して、痩せ切つたのが屹立していた。そこへそのころ四歳だった私の娘、彼にとつての孫娘が隣の女風呂から入つて来た。彼女にはその「アボジ」岩石屹立はこの世ならぬさまに見えたのかも知れない。たちまち母親たちのいる女風呂に彼女は逃げ帰つて「オバケがいた」と叫んだ。母親はおどろいたらしいが、「オモニ」は孫娘の必死の叫びも素知らぬふうにならぬさまに見えた。あいだを氣持よげに巧みに泳ぎつづけた。昔、「オモニ」は海女だったのだ。「岩石オバケ」とのなれそめもそこから始まつている。

「アボジ」は文字を読めなかつた。これは「オモニ」も同じだが、漢字、仮名の日本文字はおろか、「ハ

ングル」の朝鮮文字も読めなかった。これは「アボジ」の「岩石オバケ」のからだとともに二人がどんなに激しい人生を送って来たかをよく示す一事だが、二人は、もちろん、「学校」なるものに、どんなかたちのものであれ行ったことはなかった。しかし、彼らはその激しい人生で築き上げて来たさまざまなならぬ人生の知恵と深い洞察をもっていた。「アボジ」が自分の政治的帰属にかかわって「南北分断」に対していかにみごとな政治判断を下していたかはさつき述べた。「オモニ」は「オモニ」でテレビを見ていて、「この人わるい人やで」と突然言い出した。画面に大うつしでナカソネ某氏の顔が出て来ていた。「昭和」天皇の仰々しい葬礼の画面に対しては、「なんや、これ、うちの村でやつとることやないか」とあらためて天皇家の「出自」を考えさせる歴史認識を口に出した。

「アボジ」は独特の日本語をしゃべった。「オモニ」のことも独特のものだったが、こちらのほうには日本語、朝鮮語——それも濟州島の島ことばが混在したもので「オモニ語」としか言いようのないものである。「机と椅子」を「机」は朝鮮語、いや、濟州島の島ことば、濟州島語、「椅子」は日本語で言うのだ。日本人の私としゃべっているときには当人はもちろん日本語で話しているつもりなのに、半分は朝鮮語——濟州島語になっている。韓国人としゃべっているときには「オモニ」は朝鮮語を使っているつもりで半分は日本語——日本語と韓国語は文法体系が同じなのでこうした「オモニ語」の形もなされ得るのだが、「アボジ」の場合はちがっていて、それは「……いちばんサイソ（最初）に来たのはねエ、いもうとの主人の紹介で着物のノリをつくつとる工場に来たんだがねエ、オダ君、売りに歩いとるんだヨ。一日売った分の一割をもろうとるんだヨ。（一日）一円売れたときもあつたん

だが、だいたいはあかなんだ。アッハッハッ。……それからアブラ工場で仕事したんだがねエ。オダ君、えらい仕事で百三十キロかついで三階まで上り下りしとつたんだヨ。それから足が弱いんだヨ」というような彼が数多くの肉体労働現場で自分のものにして来た、その意味でまさだからだでおぼえた日本語だった。ただ面白いのは、そのあいまいまに「オダ君」という私に対する呼びかけが入ること、自分のことを「ぼく」というおおよそ肉体労働者らしからぬ言い方で言っていたことだ。

二つともに聞いていて私がいつも何かしらなつかしくなつたのは、ずい分以前に亡くなつた私の親父が自分のことをよく「ぼく」と言い、他人を指して「××君」と呼んでいたからだ。外国人は自分がやって来たときのその国、社会のもろもろをあとあとまでもちつづけるものだが、「アボジ」が「クンデワン」に乗って日本にはじめてやって来た一九三〇年代には、「ぼく」も「××君」もよく使われた言い方であつたにちがいない。それは年輩の在日朝鮮人に今もつてその言い方をする人がときいたりすることで判るが、「アボジ」のその「ぼく」と「オダ君」というインテリめいた言い方と労働現場たき上げの日本語の結合には迫力があつた。ことにその迫力を感じさせたのは、彼が戦争中禁制のアメをつくつて売りに歩いて警察につかまつてさんざんいじめられたときの話を彼がしたときだ。無口な上に彼の「ゲリー・クーパー」の立派な風貌が祟つたのか、ただの闇屋のアメ売りが独立運動の大闘士に見たてられて、三月、留置場にとめおかれた上に拷問を連日受けた。「オダ君、ぼくはもうとつかれて、とつかれてな。ヒザの上に棒入れられて、ひっくりかえされたり何して、いまだに、オダ君、ぼくはここが痛いんだヨ。」彼はそう言いながらヒザをなでた。べつに悲壯な言い方をしていたのではない、彼はてんたんししゃべつたが、かえつて迫力があつた。

私がアボジの「ぼく」と「オダ君」の言い方を気に入っていたのは、彼にそう言われると、「アボジ」を人生の友だちと観じる「オモニ」ではないが、「アボジ」が友人であるような親近感が湧いて来たからだ。この親近感は義父と娘ムコというような家族関係のなかでの親近感では決してなかった。もつと自由で、そして、対等、平等な人間関係におけるつながり、そこから自然に生まれて来る親近感。ほんとうは「友人」ということばもおそらく当たっていなかった。私は私が結婚した彼の末娘のことを「人生の同行者」と呼ぶが、「アボジ」もべつの意味における私の「人生の同行者」であった。いつのまにか、私は彼のことをそう感じとり始めていた。

私は旅の計画をたてた。この今や年老いた「人生の同行者」と彼がかつてゴム靴の行商に渡り歩いた東北地方を旅して歩くという計画だ。私はある日、突然言った。「アボジ、八戸へ行ってみるか。」旅の始まりはどこでもよかった。「八戸」は私の口をついて出たことばだ。私がおどろいたのは、彼がすぐ「オダ君、それはいい考えだよ」と応じたからだ。「ぼくも死ぬまえに一ぺん行ってみよう」と思っていた。死んだら行かれへんからな。」

もうひとつ私がおどろいたのは、このおしまいの「死んだら行かれへんからな」であった。判りきつたことを言うと思つたら、そうではなかった。済州島は土葬だ。棺を墓の穴深くに埋めたあと、親類縁者、穴に土を入れ、土の上にみんなであがつて踏み固める。土中の死者の魂が逃げて行かないがためである。「アボジ」はそのことを言っていたのだ。なるほど、死んだあと、「アボジ」の魂は踏み固められた墓の穴から出て行くことはできない。八戸まで飛んで来ることはできない。「アボジ」の

このことばでおどろいて、呆然としている私に、「アボジ」は「ぼくは生まで帰る」と言った。いや、そのあと、ひと言、「オダ君」とつけ加えてもいた。

しかし、八戸行は実現することはなかった。私に実現の時間がとれずぐずぐずしているあいだに、「アボジ」は病気になった。肺ガン。そして、すでに手おくれであつた。余命半年。入院した近くの病院の医者はやけに正確に診断をつけた。

それだけではなかった。彼が医者から一夜の「外泊」を許可してもらつて帰宅、住み慣れた長田の棟割り長屋で「オモニ」と一夜を明かした翌日の早朝午前五時四十六分、暗闇のなかで大地はうなりゆらぎ、一瞬のうちに五千余人の生命を奪い、何十万户の家を叩きこわした地震が起こつた。「アボジ」の家も屋根の落下こそ免がれたものの屋台骨からゆるがされて全壊同然の被害を受けた。地震後かなりの時間が経つてようやく彼らの安否を気づかつた近所の人が家のなかに入ったときには、「アボジ」と「オモニ」の老夫妻はただ顔を見合わせながら呆然と坐っていたそうだ。

私も私の「人生の同行者」、彼らの末娘も、彼らの孫娘になる私の娘も二人の安否を気づかつたが、西宮に住む私たち自身が被災者で、長田が壊滅状態になつて火災が起こつたのを知つても身動きがない。そのうち同じ神戸に住む娘のひとりの夫がバイクで彼らのもとに駆けつけ、二人を救出して近くの小学校の避難所に二人を送り込み、彼も家族もろともそこに入った。「アボジ」が末期ガンの病者として入院していた近所の病院は、べつに不親切な病院ではなかつたが、被災地は死傷者続出で「アボジ」のような末期ガンの病者にかまつていられない。再入院は断わられて、やむなく彼も避難所に

入るほかはなかった。

点滴と酸素吸入でようやく生命をつないで来ていた「アボジ」にとって、小学校の校舎のコンクリートの床の上での、一日にやつとバナナひと切れ、パン一個があればましの避難所の「棄民」ぐらしかに辛いものであつたかは容易に想像がつく。長い人生のあいだ、グチも言わず弱音もめつたに吐かなかつた老人が「わしは土方も荷役の人夫も闇市のかつき屋もやつたし、警察の留置場にも入れられたけど、このくらしはひどい」と言い出した。避難所に来てからそれまで何日も黙っていたのが突然言い出したそうだが、べつに彼は悲憤コーガイして声をはり上げたのではなかつた。いつものようにてんたんと言つたそうだが、それだけことばに迫力があつたとは、そばにいた娘のひとりがあとで私に言つた。そのとき私がそこにいたら、「アボジ」は「オダ君、この国のやつとすることはぼくはひどいと考えるんだヨ」と、朝鮮人として日本から最後の最後に至るまで何んの恩恵を受けることもなかつた過去の重みをかけて言つたかも知れない。日本の朝鮮支配が始まつたのが「オモニ」の生まれ年、「アボジ」が生まれたのはその次の年だつた。

万策つきたかたちで、「アボジ」の娘ムコと娘たちは「アボジ」と「オモニ」を避難所から「救出」して車で八時間かけて大阪の娘のところまで連れ出したあと、「アボジ」のあとつぎの濟州島の養子のもとに二人を送り出した。短期間でも、彼らに心安らかな時間をもってもらいたかつたからである。関西空港でタンを喉につまらせてあわやと思う一瞬もあつたが、とにかく「アボジ」は、彼のことば通り、濟州島にまさに「生まで帰つた。」しかし、長くは生きなかつた。たしかに濟州島の養子宅でいつとき元気を回復したらしいが、五日後、日本の娘たちの家族は、それぞれに「アボジ」の死の通知を

受けていた。すべてが地震からひと月足らずのあいだのことだ。

葬儀に私たち一家三人は濟州島まで出かけた。「北」へ「帰国」したひとりをはじめから論外だったが、日本にいる六人の娘のうちにも、合理的説明不可能な政治的帰属の問題によって、父親の葬儀にも参加できないのが何人かいた。それでも「北」の娘と日本の娘たちは電話で父親の死について話すことはできた。その対話に、濟州島から「アボジ」の死のあと始末にやって来た養子も加わった。養子をはじめ「北」の彼女と話した。期せずして、それは「南北対話」になっていた。みんなが泣いた。

早朝まつ暗ななかで養子宅を出棺する。私自身をもふくめて、家族はすべて麻の装束に身を固めていた。男はこれまた私自身をふくめて脚には脚きやハン、頭にはエボシ、あるいは、それ状のかぶり物をのせ、女はキリストのイバラの冠のごときワツカを頭につけ、喪主の養子はワラの帯を麻の衣のまわりにまわした。みんなして棺をかついで外に出ようとする直前、わたちの「哀号」アイゴの号泣のなかから、突然、日本語が聞こえて来た。「アボジ」の長女が「アボジ、何んでうちらをおいて行ってしまふのや」と泣きじやくりながら叫んでいた。

「アボジ」の墓地は濟州島の名山ハルラ山のふもとに広大にひろがる、二月の吹き下ろしの寒風吹きすさぶ原野のなかにあった。土まんじゅうと石組みの墓があちこちに立つ文字通りの原野の墓地だ。土まんじゅうも石組みの墓も、「アボジ」の先祖の土葬の墓だが、その石組みの墓のひとつに「生まで帰った」「アボジ」は入った。

儀式があつた。葬儀の最後の段階になるのか、それともそこからはみ出しているのか、お寺の坊主は来ない式だ。お経も読んではいたが、儀式の主要な要素は女たちの「<sup>アイゴ</sup>哀号」の号泣。涙が涸れ果ると、彼女たちはたちまち陽気にしゃべり、笑う。そしてまた、号泣。「<sup>アイゴ</sup>哀号」の叫びは原野に重く、また、激しくひびきわたる。私がしきりに日本の古来の「野辺の送り」を思ったのは、仏教なり何んなりがもつともらしい葬礼の儀式をつくり出すまえの、そしてそれが日本という辺境の地に持ち込まれるまえの、どの民族のどの文化にあつてもとり行われる人を葬る儀式の卒直と壮厳がそこにあつたからだ。万葉の時代の「野辺の送り」にその卒直と壮厳があつたとすれば、「アボジ」を送るこの「野辺の送り」にもそれはまちがいなくあつた。そしてまた、私が万葉の時代の「野辺の送り」とともにしきりに思っていたのはホメロスの世界であつた。「イーリアス」「オデュッセイア」にあつても、英雄たちは肉親、親友の死にあつて傍若無人に歎き、号泣し、涙涸れ果てたあととは、傍若無人に飲み、食らう。「アボジ」の「野辺の送り」にもそれがあつた。棺とともに野外の宴のための大釜も原野の墓地のつい外側に持ち込まれて来ていたのだ。すべてが終つたあと、「<sup>アイゴ</sup>哀号」女英雄たちをふくめて人びとは傍若無人に飲み、食らつた。もちろん、私も飲み、食らつた。

棺は麻の装束を着た肉親の男がかついで運ぶ。私もかついだ。そして、新しい石組みのなかに掘られた深い穴の底にみんなして置いた。それから、まず肉親、ついで親類縁者、あるいはウゾウムズウ、こぞつて土を入れ、土が石組みの上に乗らないうちで、みんながその上にのぼつた。私ものぼり、「アボジ」の末娘、私の「人生の同行者」ものぼり、私の娘、小学校三年生で地震を体

験した、「アボジ」にとつての孫娘ものぼった。男どもとともに「哀号」女英雄たちもちろんのぼった。朝がた、日本語で泣きじゃくった「アボジ」の長女ものぼった。「アボジ」の魂が石組みの墓の穴の底から外へ出て、あてもなくさまよい歩かせないがために土をみんなで踏んで堅く固める——その作業のためだ。

やがて、その土踏みの作業は誰言うともなく始まつていた。私も踏んだ。「人生の同行者」も踏んだ。私の娘、「アボジ」の孫も踏んだ。彼女はときどき跳び上つては全身の重みをその跳躍にかけるようにして懸命に踏んだ。しかし、私は彼女に言った。「もつと強く踏め。」私にも同じことばを私は言った。私は強く踏んだ。娘もさらに大きく跳び上つた。「オダ君、そんなに強う踏むな。ぼくは痛いんだヨ。ぼくはもうどこにも行かん。ぼくの長田の家はもうつぶれてないヨ。」私の足の下で「アボジ」が言った。

## 「三千軍兵」の墓

私は今年六十五歳、かなり長く人生を生きた。人の死にも、焼跡のあちこちに行き会っていた黒焦げの死体の死から始まってさまざまに行き会っている。ただ、私がここで書こうとしているのは、人の死そのものについてではない。人の死にかかわるが、墓のことだ。

いろんな墓に行き会っている。縁のあった人の墓もあれば、見知らぬ人の墓もある。いくつか書いておきたい。書き残しておきたいという今少しせつぱつまった気持ちもある。

Zの墓は草の墓だった。そうとしか言いようがない。

縦三メートル、横五メートルほどの短かい芝草が生えた一区画が墓だった。ベルリン市内の大きな墓地の一区画で、まわりはふつうに墓石をたてた墓だったから、一見、これから墓をつくる予定地に見えた。しかし、そこが墓だった。彼だけの墓ではなかった。彼をふくめて二百人ほどの死者の骨をそれぞれに納めた小さな骨壺が芝草の下に埋められている。墓石も十字架も、そこをそれと標示するものは何もなかった。芝生の墓と言ってもよいが、あまり手入れされていない芝草のひろがり、実感にそくして言えば、やはり、草の墓だ。

落葉があちこちに散乱している。私は腰をかがめて、墓地の入口の花屋で友人が買って来てくれたバラの花一本を置いた。大きな花束でも買って来てくれるのかと思つたら、淡い赤のバラの花一本だ。そのほうがこの草の墓に似つかわしいと友人は言い、私は納得した。真紅のバラだつたら、バラの花はもつと鮮明に芝草のミドリに映えたかも知れなかつたが、淡い赤のバラは芝草のなかにひかえ目に沈み込んで目立たなかつた。

バラを置いたあと、私はしばらく黙つて草の墓のまえに立っていた。頭は自然にたれていたが、祈つているというのではたぶんなかつた。考えていた。そう言つたほうがそのときの私の姿勢にも氣持にもそくしている。秋、十月——もう少し正確に言うとい九九年の秋、十月だが、Zが死んでそのときで二月経つていた。日本からしばらくぶりでベルリンに来て、着いてから彼が死んだことを私ははじめて知つた。私は慌てて友人とともに墓地へ駆けつけたが、彼の墓がそうした草の墓であることもそのときはじめて知つた。

大陸性氣候のベルリンの秋、十月は日本で言うなら、真冬の寒さだ。そして、その寒さは乾ききつている。乾ききつた寒さのなか、私は草の墓のまえに立ちつづけた。

草の墓は日本流に言えば、「無縁仏」の墓と言うべきものだ。行き倒れの旅人か何かで、名前、身もとも判らないままで死んだ人もたしかにそこに葬られている。二百人の大多数がそうだろう。ただ、なかに、Zのように名前も身もともはつきりしていて、自ら望んで草の墓に入った人もいる。

森鷗外のことを思い出す人がいるかも知れない。鷗外は死にのぞんで、陸軍軍医総監として位階勲

等あまた身に帯びた、また、大有名作家としてあつた「森鷗外」として死ぬよりも、ただの「石見の人 森林太郎」として死ぬことを望んだ。有名人、えらいさん方には、そういう「無名の死」願望をもつ人がたまさかいるようだが、Zはもともと有名人でもなければえらいさんでもなかつた。彼は無名のチマタの人だつた。無名のチマタの人として生き、死んだ。職業は私が知り合つたときにはすでに停年退職していたが、放送局員。えらいさんではなかつた。

ただ、彼はおびただしい数の死を見た人だつた。死を見、死者を見た。もうひとつかんじんなことを言つておけば、おびただしい数の「無名の死」、その死者を見た。位階勲等どころか、名前も身もとも、そうした人間の属性を示すものとしてある一切を剝奪されたかたちで、人は無数死んだ。いや、殺された。そして、Zはそれを自分に関係ない他人の死として見ていたのではなかつた。自分の未来、明日に確実に起こり得るものとして見た。Zは「ナチ・ドイツ」の強制収容所のなかにいた。

彼のいた収容所はゲエテ、シラーの都市として名高い、また民主主義の模範の「ワイマール憲法」の本拠、「ワイマール共和国」の首都だつたワイマールの郊外、ブーフエンバルトにあつた収容所だつた。ブーフエンバルト収容所はただ殺すことだけを目的とした「絶滅収容所」ではなかつたが、それでも五万六千人が死んでいる。五万六千人のなかには単純にただ殺されたのも多数いたが（そのなかにはこの収容所であまた行なわれた「医学実験」の犠牲者もふくまれている）、苛酷な労働と劣悪な生活条件によつての死者も数多くいた。当時の「ナチ・ドイツ」の言い方で言えば、「強制労働による絶滅」だが、ろくに食い物をあたえないで重労働を強制していれば、収容者は自然に死んで「生物学的解決」をとげてくれる（このことばも特別の意味をもつた用語として、現代のドイツ語にはある。

最近にも、「関連死」「孤独死」続出、餓死者さえ出た「阪神・淡路大震災」の被災地を見たドイツ人は、政治家、役人たちは「生物学的解決」を待っているのではないかと言った。收容者には名前はなかった。名前の代りに番号をつけられ、呼ばれ、その番号で收容所のなかで生き、死んだ。Zの場合は「B U・I・999」。

なぜ、Zがそこへ行かなければならなかったのかは簡単なことだ。彼の母親がユダヤ人であったからである。父親はドイツ人で高名なバイオリン演奏者だったらしいが、父親と母親は離婚させられている。結果として、彼の母親と妹は彼らが住んでいたベルリンからチェコスロバキアの收容所に送られ、彼と弟はブーフエンバルト行になった。そのとき彼は十六歳。一九四四年のことだ。

四五年四月には米軍が来るが、ブーフエンバルト收容所では收容者が抵抗運動を形成して、自らの手で解放をやつてのけた。Zもその運動の一員だった。

ここまでは、彼の母親がユダヤ人で、收容所に送られたと言えば、歴史のあと知恵が十分について今では容易ではないにしてもまだしも想像がつく話だ。いかにZの運命が苛酷であったとしてもである。しかし、その後のZのことは、なみの想像を越えている。

実は、Zは二度ブーフエンバルトの收容所に入れられている。一度目は一年だったが、二度目は四年の長さである。戦後、米軍がその地域で旧ソビエト軍に占領軍の地位をゆずって引きさがったあと、旧ソビエト占領軍はブーフエンバルトを彼ら自身の收容所にして、彼ら自身の收容者を入れ出した。「ナチ」と「ナチ」の協力者を收容するというのが目的だったが、当然、なかには旧ソビエトに協力

的でない、そうみなされた人たちも、何かのまちがいで入れられた人たちもいる。Zは抵抗運動に加わったことが仇になった。解放後、彼は母親と妹を探しにチェコスロバキアまで出かけたあといったんワイマルまで帰って来たところで旧ソビエト軍につかまり、米軍発行情の反「ナチ」の抵抗運動参加を証する証明書を見せたところで、逆に米軍側の「スパイ」にされてしまったのだ。もとの収容所に送られて、あと四年そこにいた。収容所の生活の苛酷につけ加えてかつて自分をつかまえた「ナチ」たちとの四年がどんなに屈辱的なものであったかは想像がつく。いや、想像を絶している。その四年のあいだに、「ナチ」であれ反「ナチ」であれ、自ら「生物学的解決」をとげた人の数が八千人から一万二千人——そう言われている。

ここでひとつ言っておきたい。私が彼と知り合ったのは、まだ、「壁」があつたころのことだが、そのときには、彼は「ナチ・ドイツ」のブーフエンバルト収容所の体験は語った。しかし旧ソビエトのブーフエンバルト収容所の体験は一切しゃべらなかつた。私が後者の彼の体験を知つたのは、「壁」が崩壊し、「東」「西」ドイツの「統一」が成つてからのことだ。

私は一九八五年から八七年にかけて、当時の「西」ドイツ政府の「文化交流基金」の招待を受けて、「西」ベルリンでくらししている。まだ、「壁」のあつた時代のことだ。私は「壁」のなかでくらしていたことになる。「壁」のなかで、娘までが生まれている。

そのときは私はZを知っていない。その「壁」に囲まれてのくらしの体験からドイツ人たちと語らつてつくり出した「日独平和フォーラム」という市民のつながりのなかに日本人、ドイツ人双方いろん

な人物が出現して来たが、そのひとりがZだった。「五月八日」をめぐりにして日本の市民がドイツに行き、「八月十五日」をめぐりにドイツの市民が日本に来て、「五月八日」と「八月十五日」が同じ意味をもつ日であることは説明を要さないだろう。その意味自体がこの市民のつながり形成の意義を言いあらわしている）、相手の国に着いた日から市民の住居に泊まって各地を歩く。この市民交流を八七年から始めてこれで十年、今年九七年八月にもドイツの市民が大学の先生やら学生やら労働者やら地方公務員やら家庭の主婦やら老若男女あわせて十九人がやって来て、市民の住居を泊まり歩きながら東京から始まって岡山、福山、広島、高知、室戸、さらには沖縄まで訪れている。この市民交流、つながりの形成の十年のあいだにドイツ側にあつては「壁」の崩壊、「東」「西」ドイツの「統一」という歴史的な事件が起こり、それをはさんでZが私のまゝに姿を現わし、いつのまにかまた消えた。草の墓のなかにだ。

一度、この交流のなかで日本にやって来たとき、Zは私の住居に泊まっている。彼は九十キロを越える体重の持ち主で、私の狭い集合住宅のなかでみごとに突き出た太鼓腹の巨軀を扱いかねているように見えた。そして、私より年長の彼が、このごろはお箸の使い方も手慣れたことになった当世の若い世代のドイツ人とちがつて、お箸も私の住居に来てはじめて使うような古風なドイツ人であることは来てすぐ判った。ゆで卵をゆで足りないまままで食卓に出したことがあつた。私の「人生の同行者」——つれあいがすぐ気がついて、「あと一分間ゆでる必要がある」とドイツ人式に厳密に言ってみせると、Zはその厳密をさらに上まわつて、「いや、二分」と言つてのけた。そのときの彼の世界の真理を告げるようないかめしげな顔を「ノッホ・ツヴァイ・ミヌーテン」というドイツ語の強い発音の

ひびきとともに私は忘れることができないでいる。万事に厳格、几帳面な昔ながらのドイツ人、ここにありの感があった。

草の墓を訪れたあと数日経って、私はブーフエンバルトへ出かけた。ワイマルまでベルリンから列車で行き、一泊したあと、朝早くタクシーで収容所跡まで行った。当時の建物は医学実験場までふくめてあらかた残っていて、公開されている。

霧の濃い朝だった。収容所全体が深い霧に覆われていて、どこをどう歩いても霧の壁が行く手をさえぎった。収容所の敷地を突き切って、背後のうっすらとした林の影を霧の壁のむこうに私はそのときたしかに見ている。しかし、その林が旧ソビエトの収容所時代の死体の捨て場であったことは、もちろん、そのとき私は知らなかった。

それを知ったのはごく最近ベルリンから日本にやって来た友人の話を通じてのことだ。Zの友人でもあった彼はつい一月ほどまえブーフエンバルトへ行行って来たのだが、私が訪れたあとその林が旧ソビエト時代の穴を掘つての死体の捨て場であったことが判って掘り出された。

友人は撮つて来た写真を見せてくれた。林（は松林だった）のなかにジュラルミンの棒が立っている。林立している。「これは何んだ。」「死体が見つかった個所に立てたんだね。」「死体を掘り出したのではなかった。土中の死体はそのままにして、棒を立てた。目じるしの棒と言うわけか。しかし、何んのための目じるしなのだろう。これはジュラルミンの棒の墓だとは、写真を見ながら友人と話しているなかで思ったことだ。ジュラルミンの棒の林立のまえに大小、かたちさまざまな十字架の一群が

あつた。「遺族が勝手に立てたんだ。」友人は言った。なかに、「なぜ？」と書いたのがあつた。

祖先信仰の伝統が強い朝鮮の民族の古来からの認識によれば、親より早く子供のころ死ぬような親不孝者や旅先で死ぬような人間の魂は行きどころがなくなつて永遠にさまよつている。こういう不運な人間のなかでもつとも不運なのがいくさに駆り出されて死んだ、殺された「三千軍兵」たちだ。「軍兵」は無数にいて、総称して「三千軍兵」というぐあいに呼ばれるらしいが、このことばは「軍兵」の死をふくめて天折、横死、客死などの不運死をとげた死者たちの総称でもあるらしい。彼らに対して適切に鎮魂の儀式が行なわれないと、彼らの「恨」は災厄——病、死を生者にもたらす。そう「巫<sup>ム</sup>堂<sup>ダン</sup>」は言い、祈り、うたう。人びともそれを信じて、大金を投じて、彼女たちを家に迎える。

Tから彼の「家の墓」の話聞いたとき、私はいまだこの「三千軍兵」のことばも由来も知つていなかったが、知つていれば、そのことばで彼の話を納得したと思う。今からもう何年も昔のことになる。それでもあざやかに彼がそう語つたときの彼の沈ウツななかに何か力のこもつた表情の顔を話とともに鮮明に記憶しているのは、彼のその「家の墓」の話が私の心の内部の奥深いところまで達したからにちがいない。私は感動した——と言うよりは、話は私にこたえた。あと、私は何かがつくりした気持になつた。私はそのとき彼の誕生日の祝いを東京、新宿の騒々しい飲み屋でしていたのだが、飲み屋の喧騒は一瞬はるか遠くに遠のいた。

Tは「T O M I O」の頭文字だが、彼にはそうローマ字で書くことはできても、「トミオ」とその

あきらかに日本名前である自分の名を片カナでさえ書けなかったにちがいない。彼は日本語はおそらくあとから述べる日本語の歌とあと二、三語しかできなかつたし（私とは終始英語でしゃべった）、第一、彼の顔も皮膚の色も日本人のそれではなかつた。どこからどう見ても、中部太平洋、マーシャル諸島のミクロネシア人の顔と皮膚の色をしていた。そのTの名が日本名前であることには何んのふしぎもない。彼が生まれたのはマーシャル諸島が「南洋群島」の一部としてまだ日本の統治下にあつたときで、おかげで「自然に」彼の名は日本名前になつた。かつて国際連盟の「委任統治領」とは言え実質上「大日本帝国」の版図の一部、その東端に位置した土地の住民だつたTはそう私に言い、當時、「第一級の日本国民は日本人、第二級は朝鮮人、第三級がわたしたちだつた」とつけ加えた。

彼が生まれたのはクエジェリン島だつたが、今住んでいるのはイバイ島だ——と書いたところでかつての「第一級の日本国民」だつた日本人の多くにとつて何んの意味ももたないにちがいない。ただ、クエジェリン島については、年輩の人なら、ああそこは帝国海軍の「玉碎」の島だつたと感慨を抱かれるかも知れない。「昭和」十七年——と私が今「昭和」の年号を使つて書くのはここではその言い方が私にとつて実感があるからだ、その十七年に米軍の総反攻がガダルカナル島から始まつて、中部太平洋で十八年にまず総反攻がとりついたのがマキン、タラワ島、両島で日本軍を「玉碎」させたあと、ついにクエジェリン島という大日本帝国の版図の東端に達した。それは大日本帝国の版図のなかのついに沖繩に達するまでの「玉碎」のいくさが始まつたことだ。

クエジェリン島で「玉碎」したのは主として帝国海軍の六千人の「三千軍兵」だつたが、日本の「三千軍兵」といつしよに死んだのは帝国海軍の基地建設に「ロームシャ」として朝鮮半島、台湾、イン

ドネシア、フィリピンなどアジア各地から連れて来られたアジアの民間の「三千軍兵」と、「玉砕」のいくさの巻きぞえを食って死んだクエジエリン島の住民の「三千軍兵」だった。その数はたぶん六千人のなかに入っていなかっただろう。いくさがすんだあと、大量の死体の処理に困った米軍は穴を随所に掘って死体を投棄し、あとは土で覆ってことをすませた。これは生き残ったクエジエリン島の住民から直接に私が聞いた話だが、戦後、米軍はクエジエリン島全体を巨大な核ミサイルの基地に仕立て上げたから、さつきからの言い方を使つて言えば、中部太平洋の美しいサンゴ礁の海に取り囲まれたこの島は全体が核ミサイルの「三千軍兵」の墓になったことになる。太平洋各地の戦跡を訪れて遺骨を集める日本政府がらみの遺族の遺骨収集団もこの核ミサイルの「三千軍兵」の墓に足を踏み入れたことはないし、核ミサイルの基地の下を掘らせると日本政府はアメリカ合州国政府に要請した形跡は皆無だから、核ミサイルの「三千軍兵」の墓の下には確実に「三千軍兵」の死体は投げ棄てられたままになっているにちがいない。

しかし、中部太平洋のそのあたり、核ミサイルの「三千軍兵」の墓があるだけではなかった。度重なる核実験の結果としての「死の灰」の「三千軍兵」の墓も各所にあった。

中部太平洋のそのあたりのアメリカ合州国による核実験の場所としては、一九五四年三月一日の水爆実験での死の灰の降下による被曝で第五福竜丸の久保山愛吉さんが亡くなったビキニ環礁が有名だが（その「ブラボー実験」と呼ばれた巨大な水爆実験での犠牲者は久保山さんだけではなかった。ロングラップ島をはじめとして島々で多くの住民が死んだ）、ビキニ環礁での核実験が終つたあと、近くのエニウエトック環礁に場所を移して四十数回にわたって核実験はつづけられた。おかげでそのあ

たりの島々は「死の灰」で汚染されて住めなくなり、住民にも多く被曝の犠牲者が出たのだが、実はかつてブラウン環礁の名で呼ばれたエニウェトック環礁は「玉砕」のいくさが各島で行なわれた場所なのだ。私が当時の日本政府、軍部がいかにむごい存在であったかと今さらのように思うのは、このブラウン環礁での「玉砕」を、そのころあまりに「玉砕」のニュースがつづくのでこれを知らせると国民の士気が低下するとして一切発表しなかった事実があるからだ。ブラウン環礁での「玉砕」の死者は三千人だったそうだが、この文字通りの「三千軍兵」は当時ラジオが「玉砕」のニュースを告げるために奏でられた「海ゆかば」の旋律に送られることもなく日本人の誰も知らないあいだにたたかい、殺され、死んで行ったことになる。この「海ゆかば」の旋律にさえ見棄てられた「三千軍兵」のなかには、もちろん、アジア各地からの「ロームシャ」、各島々の住民の「三千軍兵」も入っていたにちがいない。そして、いくさのあと、米軍は彼らの死体を穴のなかに投棄し、土で覆ったのだが、それで話はすまない。その上で四十数回にわたって核実験はくり返されたのだから。その上をさらに「死の灰」が覆いつくした。

その地域は「立入禁止」になっていたので、私はそこまでは出かけていない。しかし、「死の灰」の危険があまりに大きいというので、「死の灰」の堆積の上をコンクリートのフタ状のもので米軍が覆った——その写真なら見たことがある。私にその写真が正視できなかつたのは、その巨大なコンクリートのフタの下に「三千軍兵」の死体があることを知っていたからだ。さつきからの言い方で言えば、そこらあたり、「死の灰」の「三千軍兵」の墓でなかつたら、コンクリートのフタの「三千軍兵」の墓だ。「三千軍兵」はもうコンクリートのフタを押し上げて立ち上ってこないのか。

私は中部太平洋のそのあたり、ビキニ環礁やエニウェトック環礁の核実験場の跡地そのものへは行けなかったが、ビキニ環礁もエニウェトック環礁も上空から遠望しているし、クエジェリン島、さらにはイバイ島へは実際に出かけて住民とも知己になっている。知己になった住民のなかには、クエジェリン島の核ミサイル基地の撤去を求めて勇敢に運動をつづけているイバイ島の住民が何人かいて、彼らが同じ運動の仲間としてTを私に紹介して来た。

Tもそうだが、彼らはもともとクエジェリン島の住民だった人たちで、かつて帝国海軍が基地をつくり始めたころからクエジェリン島からイバイ島へ強制的に移住させられて来たのだ。その強制移住を戦後引き継ぎ、さらに強化してクエジェリン島の住民全体をイバイ島に追い出したのが、帝国海軍の基地を拡大して全島を核ミサイル基地にしたアメリカ合州国だったというのだから、話はずすぎている。イバイ島はかつてはちがった名前前の島だったが、イバイ島を占領していた米軍の小隊長の奥さんの名が「イバイ」だったので、イバイ島に島名は変った。これもできすぎた話だが、その小隊長の奥さんゆかりの名前の小島には、やれリーダー基地をつくるとか、やれ射爆場にするとかで追い出された各島の住民が移住させられて来て、幅五百メートルほど、長さ数キロの小島の人口は急増して、一万五千人余の多くがトタン屋根の掘っ立て小屋に住む「太平洋のスラム」と呼ばれるほどひどいさまを呈するまでになった。仕事はクエジェリン島の基地へ日帰りの飛行機で働きに行くことぐらいしかないのだから「スラム」になってふしぎはないが、クエジェリン島ではかつての住民も働くことはできて、住むことは許されない。基地撤去を求めるイバイ島居住のクエジェリン島住民の運動は、

ついには、クエジェリン島に上陸してテントをはって泊まり込むという行動までやり出した。Tもその行動の参加者で、行動の報告を東京のどこかの国際会議でするために日本にやって来た。

ここでこのTたちの行動についてこれ以上書くつもりはない。私が書きたいのは、会議のあと私にTが連絡して来て新宿の騒々しい飲み屋で会った——そのときの話だ。さつき彼の誕生日のお祝いをそこでしたと書いたが、実はその日が彼の誕生日であることはそこで飲んでいるうちに判ったことだ。じゃあ、というわけで、遠来の客人を迎えて騒々しい飲み屋での席は客人の即席の誕生日の宴うたげに成り変った。同行していた若い友人が音頭をとって「ハッピー・バースデー」を歌ったあと、客人がお返しのもりか歌い出したのが「モモタロサン、モモタロサン」の日本の童謡だった。呆気にとられて一同沈黙したが、日本語が一言半句もできない彼はその童謡だけはみごとに正確な発音の日本語で歌ってのけた。お母さんが教えてくれたのだと言う。お母さんは日本人ではない。生粋のミクロネシア人——と言ってから、彼は少し皮肉げに「それとも第三級の日本国民だったかね」とつけ加えた。子供のとき、お母さんがよく歌ってくれたので、おぼえたのだ——Tはそう言うてから、母親の話を始めた。と言って、長々と母親の生い立ちのことを話したのではなかった。彼女と彼とのあいだの最近の「問題」についてしゃべった。

「問題」は、彼がイバイ島で経営している食堂の建物を木造のものから鉄筋コンクリート建ての頑丈なものに建て替えようとしているのに母親が反対していることだった。イバイ島は風が強くて、木造のものはずぐこわれる。これが鉄筋コンクリート建ての建物にかえようとする理由だが、母親は今の木造の建物の地の底には「ニホンジンノオハカ」があると行って強硬に反対している。Tはその

「ニホンジンノオハカ」ということばも、それだけを正確な日本語の発音で言つてのけた。「いったい、それは何んだ」と訊ね返しかけたところで、私はイバイ島が「玉碎」の島であったことを思い出していた。海軍の水上機の基地がかつてはあつて、「玉碎」のいくさのあと、八百人ほどの「三千軍兵」が穴を掘つて埋められている。その穴ひとつの上にTが父親が死んだあと母親といつしよに切り盛りして来た食堂は位置しているのにちがいない。母親の「ニホンジンノオハカ」という一語は、端的にその事実を示している。

いつか日本人が「ニホンジンノオハカ」の「骨」<sup>ボーン</sup>を拾いに来るとわたしのお母さんは言いはるのだね——日本語で訳すとそういうことになる英語でTは早口に言つた。感情が激して来ているのが彼の早口の英語で判つた。そのとき、「ニホンジンノオハカ」の上の建物が鉄筋コンクリート建てのものだと「骨」<sup>ボーン</sup>は取り出せない。「判<sup>ドウ</sup>る<sup>ウー</sup>か<sup>ン</sup>ね、<sup>ダ</sup>彼女<sup>ス</sup>は<sup>タ</sup>そう<sup>ン</sup>言う<sup>ド</sup>のだ。」

Tはそう言つてあとは黙り込んだ。私も黙り込んだ。一瞬、飲み屋の喧騒がはるか遠くに遠のいて聞こえた。

しばらくしてTはことばを継いで、「わたしの家は墓だよ」と言つた。家の墓——家の「ニホンジンノオハカ」。そう私は彼のことばを聞いていた。

「阪神・淡路大震災」のあと、今やただの瓦礫のひろがりとなつた被災地の各所に瓦礫の墓ができた。瓦礫の適当な大きさを積んだまゝに広口のガラス瓶を置いて花を入れる。たいていはそれだけのものだったが、ローソクを立て、線香までそなえたのもあつた。犠牲者の名を書き記した木札を立てた

のもあつたが、たいていは木札もなかった。死者はまさに無名のまま死んでいた。被災地は外国人が多かった地域だ。昔からの在日朝鮮人、中国人に加えて、最近は仕事を求めてやって来た中国人、ベトナム人などのアジア人が多かったのだが、劣悪、脆弱な住宅に住む彼らの死亡率は高かった。彼らもまた無名のまま死んだ。声があつた。「そこ踏まんでください。ホトケさんが下に三人いはる。」長田——消防設備劣悪で消防車が来ても水が出なかつた、その単純な理由で地域の家屋すべてが全焼し、全壊で生き埋めになつた娘を父親が、母親を息子が火焰のなかに見捨てた神戸の長田でのことだ。私は黒焦げの死体が随所どころがついていた戦争末期の空襲のあとの大阪の焼跡のことを思い出していた。消防車までもがまる焼けになつて、赤茶けた瓦礫のなかにぶざまにころがつていた。あのとときも水が出なかつた。あのとときから何が變つたのか、いや、何が變らなかつたのか。また声がした。「ホトケさん、押んで行ってやってや。」私はかつて大阪の焼跡でしていたのと同じように赤茶けた瓦礫のひろがるなかにかがみ込んで押んだ。広口のガラス瓶のなかに水は入っていたが、花はなかつた。私は花を持つて来ていなかつた。

震災後二年半以上が経つた今、瓦礫がかたづけられてただのさら地になり、「プレハブ」の家屋があちこちに建つなかで、瓦礫の墓はめつきり減つたが、それでもときには行き会うことがある。たいがい新築の「プレハブ」の家屋のかけに見捨てられたようにして残っていて、何日かまえに誰かが置いて行つたらしいビニールに包まれた花束がまねに置かれたりしているが、多くは広口のガラス瓶だけが目じるしだ。水は入っているが、花はまず見あたらない。

庭石の墓があつた。自然に私はそう呼び出していた。西宮の私の住居のつい近くにそれはあつた。墓のある一角は、地震直後、私の一家が毎日水をバケツで汲みに行つた井戸の裏手だから知つていてもよかつたはずなのだが、地震直後のそのあたりのさまはウカツにも私は知らない。その裏手で家屋が何軒も全壊していたのを知つたのは、瓦礫がすでにかたづけられて、さ、ら、地、になつてからのことだ。いや、もうすでに庭石の墓の背後と横のさ、ら、地、では、「プレハブ」建ての家屋の建築が始まつてさえた。しかし、そこはただのさ、ら、地、だつた。地震の明白な名ごりは、かつて車庫があつたとおぼしきあたりに残されたぶ、ぎ、まにへちやげた自動車の残骸と、もうひとつ、これもまたかつて庭があつたとおぼしきあたりにあ、き、ら、かにかつては庭石であつたらしい石が二つ立つていただけだ。さ、ら、地、の広さ——そのさして広、く、な、いがさ、りとて狭くもない広さと自動車の残骸と庭石二つが、その一家全滅の家族がおそらく典型的な中流のくらしをかつてしていた家族であつたことを示していた。ここで夫がサラリーマン、妻は専業主婦、小さな子供二人——というぐあいに、その家族のくらしのさまを思い描くことは容易にできる。そのくらしはそのとき——一九九五年一月十七日午前五時四十六分までつづき、その一瞬にすべては消滅した。私がここで「一家全滅」と断定するのは、そのかつて庭があつたとおぼしきあたりに立つ庭石二つのあいだに近所の人を持つて来たものだろう、花束と子供のオモチャがいつも置かれていたからだ。いや、それはただ置かれていたのではなかつた。庭石に供えられていた。自然に庭石は墓になつていた。私もときどきそこに花を供えるようになった。そして、拝、ん、だ。何月ものあいだ、私はそうしていた。そのあいだに、背後でも横でも、「プレハブ」の家屋はでき上つて、た、ぶ、ん、さ、ら、地、の、い、や、その庭石の墓の家族もかつてしていたにちがいない中流のくらしが再

開されていた。子供の声が聞こえて来た。

何週間か、私は海外に出かけていて、庭石の墓参りを欠かした。帰つてすぐ私はそこまで出かけたのだが、庭石も自動車の残骸もきれいにさら、地から姿を消していた。いや、そこには金網が張りめぐらされていて、不動産会社所有の制札が立ち、制札にはご用の方は電話されたしと会社の電話番号が書かれていた。私ははじめて泣いた。私の眼に自然に涙があふれた。

つづきは製品版でお読みください。